第5回　第2章　人間としての自覚―哲学・宗教・芸術

哲学すること　～旅立ちの準備～

今回学ぶこと

パスカルが「人間は考える葦（あし）である」と言うように、人間は宇宙に比べればまるでちっぽけで非力である。しかし、人間はひ弱な存在であるという自分について、さらに、宇宙についても考えることができる。このように、まず自分自身について考えること、そこからさらに自然や宇宙について考えること、そこに哲学がある。その哲学の始まりを、初期ギリシャに見てみる。

講師
和田倫明

「考える」とはどういうことか

青年期には、子ども時代には考えもしなかったようなことを考えるようになる。とくに、自分自身のことについて、深く考えるようになる。何の仕事をして生きていくのか、そのためにはどのような準備をすればよいのか、といった、進路のことは差し迫って考えなければならない問題である。

現実には、自分の人生の目標がなかなか定まらず、とりあえず進学できるところ、就職できるところを見つけるのに精いっぱいかもしれない。それでも、目標が定まらないということは、それだけ「考えるチャンス」が与えられているともいえる。

このように、「自分自身のことについて深く考えること」が、哲学することのきっかけの一つである。

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

パスカルの「考える葦」

パスカルの有名な言葉、「人間は考える葦である」は、「人間の尊厳は考えることにある」という意味だとされる。それは間違ってはいないが、前後を読むと、より深いことをパスカルが言おうとしていることがわかる。

まず人間は極めて弱い、ちっぽけな存在である。しかし、人間は自分の弱さと、自分が死ぬということを知っている、それに対して、宇宙は何も知らない、と言う。宇宙と人間とでは大きさ強さでは比較にならないほど人間はちっぽけだが、そのちっぽけな人間が、おおいなる宇宙のことを考えることができる。つまり、考えるということにおいて、宇宙と人間との立場は逆転する。

「自分自身のことについて深く考える」と人間の弱さや小ささを知ることになる。しかしそのことによって、かえって世界のこと、宇宙のこと、未来のことなどをより深く考えることができる。

哲学のはじまり

自分自身について考えること、そして世界や宇宙のことを考えることを深めたのが、古代ギリシャをはじめとする、古い時代の哲学者たちである。

古代ギリシャでは、初期の哲学者たちが、万物の根源を探究した。タレスは「水」、ヘラクレイトスは「火」、といった具合である。彼らの思考は、「これ以上分けることのできないもの＝アトム」を考えたデモクリトスや、数によって世界を説明しようとしたピタゴラスのように、今日の宇宙観につながるものも生み出してきた。

コラム

キリスト教圏では、科学や哲学と宗教との関係は常に緊張をはらんでいた。神は存在するのか、という問いに対して、数学者でもあるパスカルはどう答えたか。神の存在を論理的に証明することはできないが、存在するほうに賭けても、神を信仰するほうが心豊かにいられるのであれば、この世にいる間得をするのだからよいだろうという。これは「パスカルの賭け」と呼ばれている。

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。